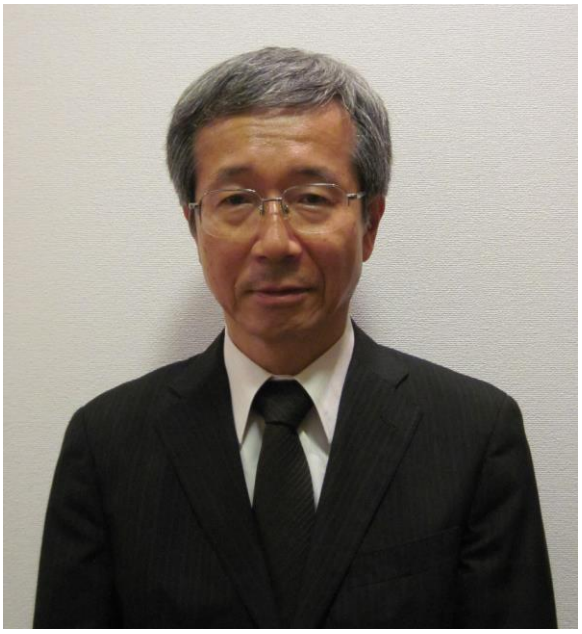
慶應義塾体育会バドミントン部創部 70 周年に当たって

慶應義塾大学体育会バドミントン部部長　　田村　俊作



創部 70 周年を皆様と共に心よりお祝い申し上げます。

戦火のさなかの昭和 17(1942)年に誕生して以来、バドミントン部はわが国大学最初の部として、輝かしい伝統を刻んできました。戦績こそ近年は今ひとつの感がありますが、部員は皆で立てた計画に従って熱心に練習を重ねていますし、試合ともなるとどこよりもおおぜいの OB が応援に駆けつけてくれます。

東日本大震災のあった昨年度は、バドミントン部にとっても厳しい一年でした。一昨年、3 部から一気に 5 部に転落してしまった男子は、3 部復帰をめざして練習に励んでいた矢先の震災で、目標としていた春季リーグ戦が中止となり、大変悔しい思いをしました。しかし、そうした中で、部員諸君が率先して、春合宿でお世話になった茨城県ひたちなか市と水戸市に義援金を贈ったのは立派でした。また、春の鬱憤を晴らすかのように、秋季リーグ戦では堂々たる戦いにより、4 部昇格を果たしました。女子はあと一歩の試合のあげく 4 部降格の瀬戸際まで行きましたが、入替戦に完勝して、その強さを見せてくれました。

部の活動を誰よりも支えてくれているのが三田バドミントンクラブの OB の皆さんであることは、部員諸君も良く承知していることと思います。日頃指導に当たる監督・コーチ・マネジメントアドバイザの方々はもちろんのこと、試合になれば遙か遠方から駆けつけてくれる OB がいます。リーグ戦の試合会場で、退院されたばかりの筈の小杉会長にお会いしたときは、驚いたと同時に、ちょっと感動しました。高井先輩には、部員一人一人のために、練習や、試合や、イベントのたびに写真や動画を撮り続けていただいて、他校からうらやむ声があるとも聞いています。

何より良いのは、さまざまな活動が自然に自発的に行なわれていることで、皆が節度をもって、バドミントンや関連した活動を楽しんでいるのは、大切にしたいことのように思われます。早稲田大学や一貫教育校との関係も同様で、長い歴史を持つ絆はこれからも大切です。試合で良い結果を出すよう励むのはもちろんですが、それだけでなく、人々とのつながりを大切にする、厳しくも楽しい部として、これからますます発展していってほしいと思っています。

最後になりましたが、70 周年記念誌をはじめ、記念行事を企画・実施に当たられた、小杉会長や草場先輩をはじめとする三田バドミントンクラブの皆様に、厚く御礼申し上げます。

創立 70 周年に寄せて

元部長、三田バドミントンクラブ顧問　関場　武

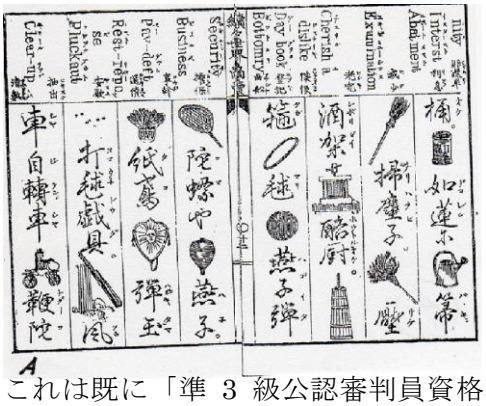
この度は創立 70 周年おめでとうございます。日本の大学生によるバドミントン競技の歴史は慶應義塾から始まったと言ってよく、昭和 17（1942）年に慶應義塾バドミントン（鳥球）倶楽部が誕生。大戦による休止期間を経て昭和 21 年から活動を再開。翌年に明治・立教と関東大学バドミントン連盟を結成、第 1 回の秋季リーグで優勝。以後トマス杯代表の岡道明、越川啓、宮永武司氏、それに広田敏秀氏ら、綺羅星のごとき名選手を輩出したことは、皆様先刻ご承知のこと。今さら小生などが申し上げるまでもないことであります。以来、監督、コーチ、現役、昭和 24 年創設の三田バドミントン倶楽部、その他の OB の方たちが一丸となって練習に励み試合で奮闘を続けて来ているわけですが、現状はなかなか厳しいものがあります。昨今、他の種目と同じように学生のバドミントン界も系列化が進み、小学校から大学まで、どこそこの地域クラブを出、名門と言われる中学を経てインターハイ常連校に進み、次は某大学ということで、何となく先が見えてしまっているような状況になっています。そして、競技人口が大幅に増え、オリンピックや世界選手権をはじめとする各種大会が頻繁に開催され、マスコミ・世間一般の注目度も以前とは比較にならないほどに高まり、学校法人もそれを宣伝媒体に使う。となると入れ込む保護者、本人そのほかがもたらす弊害も出て来るといった状況にあります。

しかし、７年ほど前、部長を仰せつかっていた頃、体育会月報に寄稿したことがあるのですが（平成 17 年 12 月号「キュッ、キュキュッ、パコーン」）、その時に申し上げた「慶應義塾体育会の良さは、アマチュア軍団がトレーニングを重ね、慶應義塾の代表として心を一つにし、臆するところなく他大学のプロもしくはセミプロ集団に挑戦し、時に勝利するところにある。そして、スポーツだけではなく、学業も重んじる。すなわち、まさに文武両道の体現をめざしているところにある。」「勝ち負けはある。しかし、それのみにかかずらっていてはいけない。それのみを追求するのは、プロの義務である。我ら中・上級アマチュア集団は、勝利もしくは敗戦に至るまでの過程が、それ以上に大切なのである。日々、倦まずたゆまず地道にトレーニングを続け、己の体調管理を責任を持って行い、また、チームの和を図る。これが大事である。チーム内の競争、上下関係、うまく出来ない焦り、その他いろいろなことがあろうが、めげることはない、へこむこともない。己を信じ

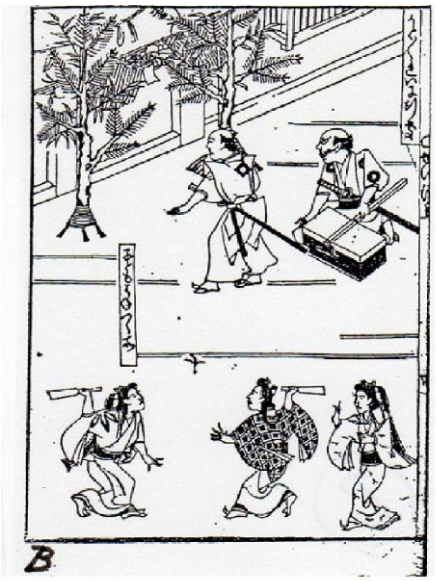
他者を信頼して、メリハリを持って練習に励むのである。その時の苦労、努力、辛抱は、必ずや諸君の人生の糧となるはずである。得がたい経験となるはずである。」は、今でも変わっておりません。

体育会バドミントン部と小生がつながる切っ掛けがいつ如何してというのが、なかなか思い出せないのですが、多分小柳君と田町スポーツセンターで出逢って、女子高の合宿だとか引退式に誘われて、というあたりだと思ってます。女子高合宿で幻の「草場踊り」を見たような気がします。小生のバドミントンは美土代町の YMCA（全くの初心者←よく素人に毛が生えた程度と言いますが、毛髪が絶滅危惧種から絶滅に向かってまっしぐらの小生には無理。結局素人のままです）から田町スポーツセンターに始まり、審判もいきなりのジャパンオープン主審（資格が必要とは知らず無資格で 3 年間）に始まるのですが、色々としがらみも出来、今では日本教職員連盟や東京都学生連盟等にも関係するようになっています。

ところで、本を見るのが商売なので、気が付いたときにバドミントン関係のものを拾っておりますが、旧い資料はなかなか見つかりません。ふるいものとしては江戸時代後期、長崎の出島オランダ屋敷の前で異国の使用人が興じている図や、天明 7（1787）年刊の森島中良「紅毛雑話」巻 1 ウーランク、ラケット之図（目録には「胡鬼板（はごいた）并羽根の図」とあり）が有名で、諸書に紹介されていますが、小生の見つけたのは明治 6（1873）年刊の「續々世界商売往来」にあるバツトレドール（燕子弾・ハゴイタ）とシトレツコツク（燕子・ハネ）の図（A）のみです。



これは既に「準 3 級公認審判員資格検定会・講習会ルール教本」の小生が担当した第 2 章 1 の「歴史（概論）」に載せてあります。また、日本にはバドミントンに似た羽根突きがありますが、室町時代の後崇光院（貞成親王）の日記「看聞御記（かんもんぎょき）」永享 4（1432）年正月 5 日に男女に分かれて行なった「こきの子勝負」（＝男女対抗羽根突き大会）」の記事と、室町時代後期天文 13（1544）年に成立し江戸時代初期万治 3（1660）年に刊行された年中行事解説書「世諺問答（せいげもんどう）」上巻に載る図（B）（目録題「はこいたの事」）も挙げたことがあります。



これには「子ともはねつく所」というキャプションが付き、右側の子は明らかにカウ

ントを数えています。打ち合っている二人の左手のバランスやフットワークはなかなかのものです。

そうなると色々と探したくなり、絵入り本や浮世絵等を覗くということになりますが、バドミントン競技につながるような構図は殆どない。今はネットで色々な情報が検索できますので他にもあるかも知れませんが、実物に当たり小生がこれはいいなあと見つけたのは、やはり京都の年中行事解説書の寛文 2（1662）年刊の「案内者（あんないしゃ）」巻 1 のこの図（C）。

クリアーとロビングといったところです。手前では男の子たちが毬杖（ぎっちょう）という今日で言うグラウンドホッケーのような遊びをしてます。また、貝原好古の貞享 5（1688）年刊「日本歳時記」巻 1（「世諺問答」を引いてます）に載る図（D）もまずまずです。但し左手が完全に死んでいます。そしてぐっと時代が下りますが江戸時代後期刊の女性向け教訓書「女今川（おんないまがわ）」の巻頭にある挿絵（E）。お姉さんたちに相手にされず跳ね上げの稽古をしている子の孤独な姿が描かれています。（相手にされないのは哀しいものです。時に相手をしてくださる草場さんをはじめとする皆様、ご芳名は一々挙げられませんが皆々様、有難うございます。そしてご迷惑をおかけして申し訳ありません）。

……という具合に果てしも無く続いて行くことになり、創立 70 周年とはドンドン離れて行きますのでこれで止めますが、実は小生、何を隠そう今年でなんとご生誕 70 年であらせられるのです。つまり、僭越ですが、言ってみればバドミントン部とともに生きてきたわけなのです。それに免じてご寛恕を賜わりますれば幸甚です。髪の毛と共に小生はもうすぐ消えますが、バドミントン部は永遠に不滅です。浮き沈みはあろ

うかと思いますが、あきらめたり負け犬根性になったりせず、常に上を目ざし練習に試合に頑張って頂きたいと考えております。学生のバドミントンはその時の状況で、急に強くなったり、えっ！あそこがというくらい突如弱くなったりします。続けていけば、また陽が当たるときが来ます。あせらず諦めず、楽しく続けて行って下さい。審判や大会に関係しておりますと、OB の方々が出場しておられ、時に審判が当たったり賞状やメダル、カップを差し上げたりすることがあります。贔屓したりは決して出来ませんが、とても嬉しくなります。現役諸君は勿論 OB、OG の方々もぜひ積極的に色々な大会に出てください。そして多くの方と羽根を打ち合い、慶應のバドミントンここにありという姿勢を示して頂ければと存じます。末筆になりましたが、慶應義塾大学体育会バドミントン部が 100 年、200 年と発展的に続いて行かれることを心から祈念申し上げ、拙文を閉じることと致します。

慶應義塾高等学校バドミントン部部長　遠藤耕一

大学バドミントン部創立 70 周年、誠におめでとうございます。「70 年」と文字では簡単に表すことができますが、時の長さを改めて思うとき、関係者の皆様が代々引き継いでこられたものの大きさに驚くばかりです。

高等学校バドミントン部も、大学バドミントン部とは繋がりがあるわけですが、すぐに目に浮かぶのは、夏季合宿や春季合宿で、高校生が大学生から丁寧に熱心に、親身になって指導していただいている場面です。技術的なことだけではなく、立ち居振る舞いも含めて、良きお手本が身近にあるというのは、高校生にとり大変ありがたい環境であると感じています。

平成 23 年夏季休業中には、高校生のために日吉記念館での練習時間を確保していただいた日がありましたが、猛暑の中、その練習に何人もの大学生の姿がありました。このような光景も強く印象に残っています。

ここで、この 10 年間における、高等学校の試合日程等に関する変更点を述べることにしますが、先ず挙げられるのは、早慶バドミントン定期戦（高等学校の部）が大学とは別の日程になったことです。新人戦が 9 月に始まることもあり、現在の大学の定期戦日程では、残念ながら参加が難しい状況となりました。このため、平成 15 年度からは毎年、夏季休業中に、早稲田大学高等学院との定期戦を行っています。試合会場は、大学の形式を踏襲し、両校の体育館を交互に使用しています。

次に挙げられるのは、横浜東部学区合同練習会が 12 月に開催されるようになったことです。これは、「技術の向上・試合機会の提供」等の目的で行われる練習会で、港北区・神奈川区・鶴見区内にある公立・私立の高等学校が集まり

、レギュラーから初心者まで、3つのレベル別に試合を行います。平成23年度は、高等学校（塾高）からは、シングルス20名、ダブルス12組が参加しました。

高等学校バドミントン部の部員数についても触れておきます。バドミントンに関心のある生徒が多いことの表れなのか、日吉会堂のコート数（3面）に比べて部員数の多い状態が続いており、この5年間（平成 19～23 年度）は、33名→36名→50名→68名→61名となっています。

高等学校卒業後にバドミントンを大学体育会で続ける者は、極めて少ないのが現状です。それにもかかわらず、いろいろな場面で高校生をご指導いただいていることに感謝いたします。

大学バドミントン部の70年にも及ぶ伝統が、今後さらに輝きを増すことを祈念して、結びの言葉といたします。

女子高部長として

慶應義塾女子高等学校バドミントン部部長　喜多村　隆

體育會バドミントン部＜創部７０周年＞おめでとうございます。併せて『記念誌』発行の祥事、心よりお慶び申し上げます。

いつからかその年期日を明確にしないが、一貫校高校の顧問は連繋して體育會副部長となるようになった。私は肩書のみで、それに見合う貢献を何らなしていない。にもかかわらず、この『記念誌』に駄文を寄せていることには身をこごめて恐縮するばかりである。但し、常に気持ちは體育會バドミントン部にも向いているつもりである。機会があって日吉に赴けば記念館をのぞくことにしている、という程度では言い訳にもならないだろうが。

さて、バドミントンプレーヤーとしての経験が皆無であった私が女子高バドミントンの部長になったのは、遡って８６（昭和６１）年４月のことである。当時の２年生部員の一人に頼まれ、そのまま教員会議で名乗りを上げてすんなりと決まった。それまではマンドリンクラブの顧問であったから、全くの畑違いの世界だったわけだ（ちなみにマンドリンの方は３年後に任をおりた）。そこに深い思慮もなく、つまりは言ってしまえば「なりゆき」で引き受けた部長職である。それを人事顧問と称する。爾来今日に至り、約四半世紀に亘ってその任を継続し、体連系クラブの部長としては女子高最長不倒となっている。

その顧問初年に在籍していた部員が、後に體育會に進む古屋（旧姓酒井）香世子君・中島（旧姓鈴木）紀子君・松村（旧姓小澤）さち子君のＨ４期の黄金トリオである。酒井君のリーダーシップ、鈴木君の負けん気、小澤君のバランス能力は今でも覚えている。

その後も寺島智美君〔H5〕・藤澤（旧姓小島）美和君〔H7〕・後藤（旧姓山本）順子君〔H11〕・佐々木（旧姓須賀）弘子君〔H12〕・大久保（旧姓米谷）香里君〔H12〕と続いたが、近々の十年を鑑みれば“中興の祖”として高橋明子君〔H20〕の存在は大きい。具体的な話は適さないが、彼女が諸々の苦しい思いを耐えてきたことを知っている。彼女が女子高から體育會バドミントンへの道を切り拓いてくれたお蔭で、その後、和栗恵君〔H21〕・安達華君〔H22〕・本田聖子君〔H22〕・石川陽菜君〔H23〕と続き、現役の松本悠莉亜君・高崎友里香君へと綿々とした流れができ、そして最も新しい関衿沙君へと繋がる。他にも一旦は體育會に所属したものの諸般の事情から退いた者もいる。この状況を「輩出」と表現するのはおこがましいだろうか。「受け容れていただいた」と表すべきだろうか。

一方、體育會からは女子高コーチ担当を途切れることなく決めて戴いている。普段はご自身のプレーヤーとしての練習があるから、なかなか女子高練にまで手が及ばないのが実情だろう。それは致し方がないことと、部員ともども得心している。そこに恨み言はない。女子高の夏と春の合宿時については、これも時期的に大学の合宿・遠征と重なることも多いのだが、何らかの形で指導係を派遣して戴いている。歴史を遡れば、初期の頃には草場律君〔S60〕が、近年までは小柳尚久君〔S59〕のお二方の存在が何より圧倒的だ。草場君のゲームと＜踊り＞が既に“伝説”となってしまっているのは残念である。是非復活することを熱望している。また小柳君の熱血指導は体育館内全体に溢れることで名を馳せている。最近では酒井緑君〔S60〕（ちなみに彼女は私が女子高就任１年目の折に高校３年に在籍していた）と金丸敦君〔H14〕（彼は女子高コーチ時代よりもその後の方が指導率は高くなっているが、これは皮肉ではない）には特にお世話になっている。皆さんお仕事を持ちながら、一泊でもあるいは日帰りでも時間を作ってくださって、それぞれに温かい指導をしてくださった。いわゆる「手弁当」であるから、頭が下がる。歴代コーチ皆さんにお世話になったが、敢えて名を挙げれば小野寺康秀君〔H3〕が最も懐かしい。

五月女季孝監督にも就任時から女子高のことの様々を相談させて戴いてきた。その親身なお気持ちは嬉しい。お人柄である。女子高の試合や引退式にもお出で戴けることも多い。そしてもう一人忘れてならない（否、忘れようもない）方に、関場武元體育會バドミントン部部長がいる。私にとっては大学文学部国文学科の敬愛する先輩であり、親しくおつきあいさせて戴いている先生だ（と言っても、直接講義を拝聴したことはないが）。女子高バドミントン部でも「女子高監督」という肩書きで、別格の存在として遇している。お忙しい中、普段の練習はおろか合宿にまで参加して戴くこともあるのは、本当に感謝にたえない。私が女子高部長の座にいるのは、関場御大をいつでも迎えいれるため、という一面もある。特に支障がない限り私の定年までの残り５年余は部長を続ける心づもりだから、それまでは常に御大の席を暖めて用意しておく。

幸いに現在の女子高バドミントン部は所属部員も多く、三学年をあわせると５０名を超える。体育館が狭いために練習量が限

られるというデメリットもあるのだが、数から言えば隆盛を誇っている（合宿時に八面のコート〔山梨県立北麓体育館〕に部員が広がってシャトルを打つ姿は圧巻だ)。しかし、その数に比して體育會に進む率は低い。そこには様々な要因が考えられるが、端的に言えば「不安感」ではないか。一方で「挑戦」という気持ちがないわけではないだろう。仲良しクラブをしているつもりはない。公式ルールは勿論知っている。礼儀も弁えているはずだ。大学記念館の練習に加えて戴いたり、早慶戦のお手伝いも貴重な経験になっていて、雰囲気もわかっているだろう。女子高での少ない練習量では所詮はしれているが、技能的にはそこそこ打てる部員もいる。でもＡＯ入学組等とは格段に違う。はたして女子高出身者の居場所はあるのだろうか。スキルアップは最大の目標かもしれないが、絶対の正義だろうか。

蛇足だが、塾の一貫校では中等部にはバドミントン部がない。中等部には中等部なりの事情があるのだろうが、一貫教育という面では実に惜しい。生徒の需要がないとは思えない。幼稚舎でバドミントンの愉しみを知った生徒の心を継続できないのは残念である。何とかならないものかと思う。

體育會バドミントン部がこれから益々発展することを祈念して、擱筆する。

慶應義塾体育会バドミントン部創部 70 周年に寄せて

慶應義塾普通部バドミントン部部長　浦口　新吾

慶應義塾体育会バドミントン部創部 70 周年を心よりお慶び申し上げます。

私は普通部で芸術科（書道）の教員をしております。私が普通部に奉職して丁度 10 年になります。福岡の高等学校で書道の教員をしておりましたが、縁あって普通部でお世話になることになりました。私自身は、プレイヤーとしては剣道から軟式テニス、そして硬式テニスと渡りバドミントンの経験は全くございませんでした。福岡の定時制高校に勤めた際、バドミントン部の顧問に配属されたのがきっかけでバドミントンをはじめました。当時、定時制・通信制高等学校の大会で全国大会個人 3 位に入賞した生徒がおり、その生徒とともに練習に励みました。部員数は男女合わせて 15 名程度だ

ったでしょうか。授業終了後 2 時間程度の練習しかできず、ひたすら交互練習とランニング、自宅でのイメージトレーニングといった感じ

でした。生徒に恵まれ恥ずかしながら、九州代表監督として小田原に来た時の事がよき思い出となりました。全日制の大会とは見劣りすると思いますが、その時の光景がかなりの刺激になったことは間違いありません。

普通部では是非バドミントン部に配属していただきたいと願っておりました。普通部では新人について、着任3年未満は様々な部会に関わることになっています。奉職1年目は剣道部に配属されていましたが、当時バドミントン部部長をなさっていた理科教員の和田先生にお伺いし、バドミントン部にも顔を出させていただいておりました。夏の合宿では剣道部とバドミントン部を渡り歩き、2年目はバレー部配属でしたので、同様にバドミントン部と両立させていただきました。3年目よりバドミントン部副部長として配属されました。現在は私が部長、和田先生が副部長という体制で部会活動を行っております。部員は3年生11名、2年生5名、1年生6名です。おおよそ毎年20名前後といったところでしょうか。活動曜日は週3回（月・水or金・土）です。運動部会22、文化部会17と部会数も多いためなかなか生徒数は安定しないのが現状です。もちろん部員の半数が兼部です。バドミントン部と他の運動部と兼部して頑張っている生徒もいます。基本的に普通部出身者がＯＢコーチとして普段の練習や合宿をともに過ごすスタイルです（宿泊を伴う行事もこのようなスタイルで行われています）。長い間コーチとして指導いただいた矢澤さんが５年前に普通部の教員として奉職され、バドミントン部の副部長として活動することになりましたが、現在フィンランドへ海外研修中です。

ところで、大学体育会と普通部についてですが、7年程前だったでしょうか。五月女監督が普通部に来られてお話をいただいたことがあり、小柳先輩（S59）を頼って大学の練習に参加させていただいたことがありました。当時の生徒は、もう大学4年生になる頃かと思いますが、当時は人数が一番多かった時代で40人弱だったと思います。小柳先輩には何度か普通部の練習をみていただいた事がありましたが、記念館での大学生を御指導されている熱意に普通部生一同引き締まる思いで練習に参加させていただいた事を記憶しています。大学生の皆さまも貴重な練習時間に、懇切丁寧に普通部生に接していただいて大変勉強になりましたし、普通部生も喜んでいました。おかげさまで当時の3年生は港北区大会で優勝し、市大会にも出場することができました。次の代もダブルスが優勝するなど感謝いたしております。その後は、なかなか巡りあわせが悪く3位が続いています。

一昨年度からでしょうか。再度五月女監督からお話をいただき、船矢さんと、三浦さんが普通部の練習に参加して下さっています。非常に丁寧で優しく、何より生徒目線で接していただいて生徒も大変懐いています。昨夏は、お二人ともお忙しい中合宿に参加して下さり御指導していただきました。合宿は毎年7月下旬に、長野県飯山市野沢温泉ロッジたなかやを宿に4泊5日で行っています。三浦さんは広島から参加いただき、途中参加の生徒引率に体調不良者の途中帰京引率まで面倒いただき、船矢さんは就職面接のある中、長野と東京の往復と感謝の言葉を述べても述べきれません。お二人のプレーのみならず、人となりに生徒達は尊敬と憧れの気持を抱いています。つい先日は前表さんも普通部生と交流していただきました。

五月女監督には、普通部側からの一方的なお話をさせていただき、それを快くお受けいただいたこと、このような素晴らしい人材を普通部に派遣していただいたこと、常に普通部を温か

く見守って下さっていること、紙面をもちまして改めて感謝いたしております。
今後とも普通部をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、大学体育会バドミントン部のますますのご発展と関係者皆様のますますのご活躍を祈念いたします。

慶應義塾幼稚舎バドミントン部部長　武田　敏伸

体育会バドミントン部が創部 70 周年を迎えられたことに対しまして、心よりお慶び申し上げます。また伝統あるバドミントン部を築き上げてこられました OB、OG の皆様、現役の学生、指導陣、並びに関係者各位に敬意を表させて頂きます。

私個人といたしましては、普通部でバドミントンを始めたものの塾高では短期間バドミントン部に在籍しただけで、その後すぐに普通部のコーチにまわり、大学では KBF というバドミントンの同好会に所属しておりましたので、体育会は遠い存在であり、いまこうして体育会の記念部誌に私などが寄稿させていただくこと自体、恐縮に存じますが、ご指名を受けましたので一筆執らせて頂きます。

私が顧問を務めている幼稚舎のバドミントン部は、記録によりますと昭和 30 年代の一時期にも存在したことがあったようですが、当時、どのような活動をしていたかは全く分かりません。現在のバドミントン部は、私が 19 年前に立ち上げました。当初は、前身の健康体育クラブのコンセプトを引き継ぎ「運動が苦手でも運動がしたい子どもの受け皿」として発足いたしました。活動内容もただシャトルを打っているだけで、指導らしいことは何もしていませんでしたが、9 年前に五月女現監督と普通部バドミントン部時代からの親友である同期の永井直彦君（S61）から誘われ、幼稚舎バドミントン部が新年会に参加することとなりました。

またその数年後、幼稚舎バレー部の先生から合同合宿の提案があり、それをきっかけにバドミントン部も毎年、夏合宿も行うようになったため、以来、多少の指導を行うようになりました。また、偶然 7 年前から東京都の私立小学校のバドミントン大会が開催されるようになり、羽根打ちの域は脱しないものの、現在は“東京都私立小学校大会での優勝”という目標をもって練習しております。

とはいえ、練習は週 1 回・年間 25 回ほど。しかも 1 回の練習が 1 時間（冬季は 45 分）でコートが 2 面しかなく、基本的な技術を教えることは容易ではありません。

そのような状況下でも女子だけではありますが、バドミントンが好きな子どもが集まり、毎週バドミントンを楽しんでおります。最近は、学年の中で比較的運動能力が高い子どもも入部するようになりました。東京都の私学の大会でも、第 1 回大会からそれなりの結果を出しております。ただ、この結果は私の指導によるものとは思っていません。7 年前の第 1 回目の合

宿では、忙しい中、都合をつけて当時体育会1年生の中村翔一君（H20）と吉永裕貴君（H20）が泊まり込みで指導に来てくださいました。昨年、今年と体育会の植田啓生君（H23）も合宿に参加してくださいました。彼らにとって母校でもない、そして打っていてもシャトルが返ってこないような子どもが相手の幼稚舎の合宿に来てくださることは申し訳なく、しかし大変有難いことです。また有給休暇を取って、毎年数日参加してくださる永井敦美さん（S61）や井上雅博君(H2)には感謝してもし切れません。通常の練習では十分にシャトルを打つことができない幼稚舎生も、夏合宿ではこのようなコーチの方々と思い切り打つことができ、楽しく有意義な時間を過ごしております。合宿に指導に来てくださる体育会関係の方々は、ただバドミントンを教えるだけではなく、自由時間では子どもたちと遊んでくださり、心身とも疲労されているとは思いますが、本当に幼稚舎生は慕っております（以前、指導してくださった中村君、吉永君が早慶戦に出場した際には、幼稚舎生たちもコートサイドで応援させていただきましたが、最近は幼稚舎の入学試験に時期が重なってしまい、なかなか応援に行けないのが残念です)。また毎年1月下旬には、五月女監督が「親子バドミントン教室」を企画してくださり、幼稚舎生と共に保護者も楽しんでシャトルを追っております。「親子バドミントン教室」は大学の期末試験期間に行われますが、約10人前後の体育会バドミントン部の部員の方々がサポートしてくださります。このように考えると、現在幼稚舎バドミントン部が東京都の私立小学校の中で好成績を残したり、楽しくバドミントンを続けていけるのは、体育会のサポートがあってからこそというのは一目瞭然です。

毎年3月になると、バドミントン部の部員は「武田先生、中等部の先生になって、バドミントン部を作って！」「私、中等部に行ったら、バドミントン部を作ってもらうように中等部の先生たちに相談してみる。」等と言って卒業していきます。勿論、学校にはそれぞれの事情というものがありますが、中等部にはバドミントン部がなく幼稚舎バドミントン部の卒業生が競技を継続できないのは残念です。

ただ最近は幼稚舎バドミントン部の卒業生が毎年のように女子高のバドミントン部に入部しておりますし、事情があり途中で辞めてしまいましたが、体育会に籍を置いた者もおります。幼稚舎バドミントン部は今年で19年目を迎えますが、ある程度練習するようになったのは9年前からです。今後、1人でも多くの幼稚舎バドミントン部出身者が女子高、大学で活躍し慶應義塾のバドミントンに貢献することを願っております。

創立７０周年にあったて

三田バドミントンクラブ会長　小杉良雄

慶応義塾大学体育会バドミントン部も創立７０周年を迎え誠にご同慶の至りです。

この間長くご指導・ご援助頂いた学校の先生方、関係者並びにＯＢ会の皆様に心より感謝申しあげます。
創部当時の１０数年は日本のバドミントン競技の先頭に立ってリードする立場にあり誇らしく思っていましたが、その後は下降線を辿り現在は男子４部、女子３部で奮闘中と理解しています。この傾向は１９６０年代中頃より徐々に始まり、私が会長を引受けた約９年前には員数的にも男女合せ僅か７～１３名程度となり、戦績も上がったり下がったりで正直心痛の種でもありました。これには入試の難しさ、学生の同好会志向、バドミントン競技の普及化（小学校から始める裾野の広がり）等々の影響があるとみています。

然しながらＯＢ/ＯＧ・学生の危機感により努力の結果５～６年位前から部員数も増加し（平均３０～４０名）、部活は活発化し、これにより次なるステップである質（戦力アップ）への挑戦が課題となってきました。然しながら一方で大きな困難性も感じられる昨今です。

そのためには改めて云うまでも無くインターハイ出場レベルの男女を４年間にそれぞれ最低１（～２）名入部させ戦力(技量）の核となし、同時に多数を占める進学校バドミントン経

験者をシッカリ育成したチーム作りが肝要です。そのコンビの力で常にリーグ戦３部に留まり、時に２部を伺うことこそが先ずは手の届く現実的目標であろうかと感じています。一問題は特別基金の利用と相俟ってどう安定的に実現するかです。
又この際申し添えますが塾１５０周年記念を期に、練習場としてのコートは学校側のご理解の下、改修日吉記念館（常時４面）と蝮谷体育館（臨時４面）とで整備され恵まれてきたと存じます。

今後は上記を踏まえ、今や約３２０名の大世帯になったＯＢ／ＯＧと現役とが更に一体化し、塾体育会のモットー「文武両道」と名言「スポーツの目的は勝利にある。だがスポーツの価値

はそれを超えたところにある」とを胸に、我等が愛する伝統あるバドミントン部をもう一度強くし、その上立派に育った後輩達をどしどし世に送り出していきたいものです。

私自身ももう少しだけ頑張りますが、そのためＯＢ／ＯＧ一人一人の更なる相互親睦と積極的なボランテア活動が不可欠です。と共に今後の体育会４０部を束ねた新生三田体育会の新しい、前向きな活動にも強く期待をしたいと思います。

今回の７０周年を皆様とご一緒に喜ばしく祝うと共に、次の節目となる７５周年・８０周年での飛躍に向け是非とも皆様ののお力を物心両面でお貸し頂きたく、何卒宜しくお願い申し上げます。

前監督として

前監督　Ｓ５４卒　森下　一夫

シドニーの赴任から帰国した１９９３年６月に、４年ぶりに日吉の記念館を訪ねました。すぐさま、当時レギュラーだった清水君（H8 卒）とシングルスをやらされて、フラフラになった思い出があります。４年間バドミントンから遠ざかり、ゴルフやテニスですっかり体が鈍っていましたが、バドミントンを再開するきっかけになりました。それからは少しでも部への貢献ができればと思い、週末には記念館に通うようになりました。清水先輩（S52 卒）から薦められて、１９９７年に当時監督の鎌田君（S56 卒）からバトンを引き受け、監督を７年間務めました。

当時の男子は関東学生リーグ３部にいて、なんとかして３部優勝・２部復帰を目指していたものの、なかなか勝ち上がれない状況が続きました。当時は大学生の体育会離れが深刻となり、バドミントン部も例外でなく、部員が１～２名しかいない学年もありました。女子については、リーグ戦への参加がやっとという苦しい時期が続きました。

１９９０年からスタートしていた湘南藤沢キャンパス AO 入試で、スポーツに秀でた選手を獲得できるということで、インターハイや関東大会などで優秀な選手の勧誘を積極的に始めるようになりました。知り合いの高校の先生に

連絡したり、試合会場を駆け回って、先生や高校生に声をかけて受験生を募りました。受験してもなかなか合格につながらず、歯がゆい思いをしましたが、
少しずつ成果が現れ、男子も女子も優秀な選手が入部するようになり、チームの中心になって活躍してくれたことは嬉しいことでした。チームの仲間もそれに釣られて、切磋琢磨するようになったと思います。実業団のサントリー女子チームのコーチに携わってきた私はその経験を生かして、厳しい練習内容を考えて学生に課題を与えながら、自ら学生と一緒になって汗を流しました。
３０～４０代の会社員が部の指導をするのは時間的に余裕がなくて本当に大変です。私も家内や子供たちには大きな負担や犠牲をかけてしまいました。それでも部の手伝いをしてきたのは、お世話になった先輩への恩返しもありますが、何よりも後輩の学生たちが努力し成長していく姿を楽しみにしていたからです。コーチとして手伝ってくれた、現監督の五月女君、諏訪君（H3 卒）、茂木君（H4 卒）、巽君（H6 卒）、川野君（H10 卒）、その他、一緒になって学生たちの面倒を見てくれた後輩たちには本当に感謝しています。
監督として一番辛かったことは、信頼していた学生が何人か退部してしまったことでした。現役の皆さんは、辛いことや悩みもあるとは思いますが、是非４年間続けて欲しいと願っています。学生のうちに将来のことをしっかりと考え、バドミントンや勉強、それ以外でも、自分のできる最大の努力をしてほしいと思います。バドミントンは小学生低学年くらいの時期から始めないとなかなか大成しない、技術面がものをいうスポーツです。しかし現役の皆さんには大学４年間の間に努力を積み重ね、少しでも自分を高めてほしいと願っています。

「半学半教」

慶應義塾体育会バドミントン部監督　Ｓ６０卒　五月女　季孝

慶應義塾に縁のある「半学半教」という言葉をご存じだろうか？教育の場において教える者と学ぶ者を区別せず、互いに教え合い、共に学び合う姿勢・仕組みをあらわす言葉である。江戸時代から明治初年にかけて、経営基盤の弱い私塾が一般的に行なっていた教育形態だと言われている。すなはち、すべての生徒が同時に師であり、師もまた学ぶという境遇が共存する形態を指す。

私がバドミントン部の監督を拝命して以降、我が部もまさに半学半教を実践している。いや、本来であれば師という立場であるはずの監督が、師たる器・技量の至らなさから半学半教を余儀なくしていると言った方が正鵠を得ているかもしれない。

かような事情はさておき、部活動の場で部員自らが師となって他の部員たちを率いている姿を目の当たりにすると、強く感銘を受けるのは私だけではないだろう。自主性を育むうえで「半学半教」は理に適った仕組みだ。これは独立自尊を理想とする塾の方針にも適している

といえよう。

また、監督である私自身が部員たちや OB、OG 諸先輩方から学ばせていただく機会も少なくない。「半学半教」という環境の中で「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」を実感する立場、それが監督である私が日々感じていることである。

監督就任後の 8 年の間には実に様々なことがあった。そんな中から「半学半教」という言葉を思い浮かべるような、いまでも強く印象に残っている出来事を二つほど紹介したい。

一つめは、主将が同期の仲間たちに“チームを改革し挑むべき道”を指し示した出来事、つまり部員が師を務めた事例である。

それは慶應義塾体育会バドミントン部が創部以来、初めて 4 部に降格し、その屈辱を晴らすべく 3 部復帰を目指していた頃の男子チームのことだ。当時、4 部優勝まであとわずかに迫りながら 3 期連続で 4 部 2 位と足踏み状態が続き、リーグ戦のたびに苦渋の涙を流した。

実力的には優勝校にまったくひけをとらないのだが、どうしても優勝に手が届かない。「自分たちには何かが足りない」熟考の末、T 主将が下した決断は「勝負への拘り」「甘えとの決別」「レベル別練習の実施」であった。レギュラーとそれ以外のメンバーが別々にコートに入りメニューを分けて練習するという。多くの OB にとってはごく普通の練習方式だが、当時は部員がわずか 5 人にまで減ったところから徐々に増え始めていた時期であり、男女全部員が一緒に練習することが当たり前に行なわれていた時代である。当時の部員たちにとって「レベル別練習の実施」は画期的であり、かつ冷徹な方策であった。

試験終了後の練習再開を前に、最上級生たちが集まってミーティングを行なった。T 主将が口火を切る。「3 部復帰を必ずや実現するため、再集合直後からレベル別に分けて練習する」その台詞に T 主将の強い覚悟を感じ取った S は次のような提案をした。「わかった。ただし、B レベルのメンバーのモチベーションを上げるため、A メンバーと対戦したり、A チームに昇格するチャンスを設けてほしい。A とのレベル差を実感する場を作ることは、B が強くなるため、そしてチームの総合力をあげるためには欠かせないからだ」それに対して T 主将は「そのつもりだ。でも覚えておいてほしい。レギュラーメンバーは、他校のレギュラーがどんな練習をしているのか？彼らとのレベル差が縮まっているのか？それとも広がっているのか？相手の状況や我々との実力差を測る機会などまったくない状態のままリーグ戦に臨み、その一発勝負の中で結果を出し、チームを昇格させることを求められている。レギュラーはそのような重圧と緊張感の中で日々の練習に取り組んでいるということを」私の目の前で繰り広げられた T 主将と S とのこのやりとりに対し、監督の私はひと言も口を挟む必要がなかった。

後輩たちの育成環境の構築に尽力し、時には勇気をもって主将に提案する最上級生がいる。その提案に対して、チームを代表するレギュラーの置かれた苛酷な立場を丁寧に説明し、チームの勝利のために鬼となり厳然と決断ができる主将がいる。これは良いチームが生まれるかもしれないと感じた瞬間であった。そして、T 主将のこの台詞は、我がチームにレベル別練習再導入の幕開けを宣言するものとなったので

ある。

もう一つの事例は、今は亡き K 先輩の行動から監督である私自身が学んだことである。

前述の T 主将のもと、見事 3 部復帰を果たしたあとの最初のシーズン。3 年ぶりに復帰した 3 部での後輩たちの活躍を見ようと多くの OB が応援に駆け付けた。リーグ戦初日第一試合でいきなり前期シーズンの 3 位校を僅差で倒し、慶應の動向に注目が集まり始めた大事な二日目の第一試合、対日大経済学部戦。第 1 シングルスに出場した 3 年生の M は相手校エースと対戦した。

4 部では不動の第 1 シングルスとして対戦校に恐れられていた M も、3 部復帰後はなかなか思うようにプレイさせてもらえない。第 1 ゲームを 17-21 で落としたそのとき K 先輩が私に近づいてきた。K 先輩はかつて日本代表としてアジア大会に出場し金メダルを獲得した超スーパープレイヤーである。M から見れば雲の上の、そのまた上の、もっともっとず～っと上の存在だ。その神様のような K 先輩が私の耳元で囁く。「M にアドバイスをしてもいいかな？」私にはその申し出を断る理由など一つもなかった。あえていえば、駄々っ子の M は素直にアドバイスをきくような性格ではないことが気になったぐらい。「どうぞ。お願いします」と私は答えた。ところが、コートチェンジをする M の背中をじっと見つめていた K 先輩は M にアドバイスをすることなく再び席に座ってしまったのである。

第 2 ゲームに入ると相手の勢いは増し、M は良いところなく 10-21 で無惨に敗れ去った。しかし私はこの試合の経過をはっきりと覚えていない。なぜならば、K 先輩の行動が気になり、思いを馳せていたからである。なぜ、アドバイスをするためにわざわざ私の了解をとりに来たのか？「お願いします」と答えたのに、なぜ M にアドバイスをしなかったのか？私にはその理由がまったくわからない。悔しい。指導者としての器の小ささを痛感させられ、K 先輩の心のうちを探り続けているうちに M は負けてしまったのである。

あのときの K 先輩の行動は、それからもずっと私の頭の中から離れることはなかった。どれくらい後のことか記憶にないが、K 先輩があの時“アドバイスをしない”という決断をした理由がわかるようになった気がした。ところが、K 先輩が行動した理由を自分自身で探りあてようとしているうちに、K 先輩はこの世を去ってしまわれ、ついに本当のことを聞かせていただくことはできなくなってしまっていた。

その後、K 先輩のご自宅を何度か訪問するうち、奥様から生前の K 先輩にまつわる様々な話しをお聞きし、K 先輩のお人柄を深く知る機会に恵まれた。お子様への躾にあたり、頭ごなしに叱りつけるのではなく、お子様の素直な気持ちに対して思いやりをもって行動されていたことや、お孫さんたちと接するときの愛情あふれる振る舞いなどについて聞いているうちに、K 先輩が「人を育てる際に大切にしていたこと」が見えてきたような気がした。そして、あの時 K 先輩が M にアドバイスをしなかった理由は、おそらく私の推測通りで間違いないと確信に変わっていった。ご自宅に伺うと、仏壇に供えられた写真の中で K 先輩が「本当にそれであっているかな？」とはぐらかすように私に向かって微笑んでいる。

「半学半教」という言葉の根底には、学問は上達すればするほど奥深く、それを究めることは一層難しくなるもので、学問の完成とか成就ということは永遠の課題なのだという考え方、すなはち福澤先生が好んで揮毫した「愈究而愈遠（いよいよ究めていよいよ遠し）」の思想が潜んでいる（慶應義塾豆百科 No.16 より）。

創部 70 周年という記念すべきときを迎え、いま改めて大先輩たちから連綿と受け継ぎ、築

き上げられてきた慶應義塾体育会バドミントン部の歴史の重さを受け止めたい。そして、上達することの奥深さ、究めることの難しさという真摯な姿勢を大切にし、福澤先生の教えを胸に秘め、「半学半教」の良さをチーム運営に活かしつつ、人材の育成および慶應義塾体育会バドミントン部の再生・復活に向かっていこう。

（2012 年 3 月 3 日記）

1984 年 8 月 東日本大会（於：札幌）
団体戦 対東北大学 五月女･小出（左）組

元コーチ　平成４年卒　茂木　一秀

創部 70 周年おめでとうございます。私が大学を卒業した年に 50 周年を迎えたと記憶しており、それから 20 年、時の速さを感じます。

海外にいる OB として寄稿の依頼を頂いたことを光栄に思います。私は 94 年に大学院を卒業し、入社後 13 年間東京勤務でした。2007 年 4 月より駐在員としてアメリカ西海岸のサンフランシスコ～シリコンバレー地区（通称ベイエリア）で働いています。現役の学生から電子メールで送られてくる案内や試合結果をアメリカでも拝見していますが、私が赴任前に 1 年生だった部員がすでに卒業し、名前を見ても現役のプレーぶりがもはやイメージできなくなりました（いまは高井先輩が送ってくださる DVD が貴重な情報源です）。そう考えると駐在の 5 年は長いと感じます。ここベイエリアでは自宅で英語以外の母国語を話す家庭が半数近くある多国籍の社会なのですが、中国・台湾を中心にアジア系が 30%を占めていることもあり、バドミントンがとても盛んです。私の自宅から車で 30 分以内（約 40km 圏内）に 6 か所のバドミントンクラブがあります。各クラブは 8～17 面のバドミントン専用の体育館を持ち、朝 9 時から夜 11 時まで毎日営業しています。各クラブには現役のアメリカ代表や、インドネシア、マレーシア、中国の元代表選手がコーチにおり、裕福な中国系の子供を中心に日々ジュニアを育成しています。もちろん一般人でもコートを利用することができ、夕方以降は連日コート待ちができるほどにぎわっています。私も赴任当初から 3 年ぐらいはたまに利用して汗を流しておりました。どのクラブにも上級者向けのチャレンジコートがあり、勝ち残りのルールとなっています。一旦負けると 1 時間近く待たされることもあります。だから皆、真剣勝負です。コーチ陣や代表候補も参戦してくるため、そのコートだけはレベルは高いです。日本に比べてゲーム展開はやや大味ですが、様々な人種の人と交流することができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。ここ 2 年は家族が増えたこともありバドミントンからめっきり遠ざかっております。

オープン大会も数多く開催されていますが、規模の違いは様々であれ優勝賞金が出るというのが日本との大きな違いでしょう。一番大きな大会では賞金総額 2 万ドルで、元世界チャンピオンの Taufik Hidayat が招待選手として海を渡って参戦し、他に Halim Haryanto Ho,

Tony Gunawan, 現役アメリカ代表も出るため、間近でプレーを見られるだけでなく、一流選手と対戦できる貴重な機会です。私も一度ダブルスで参加し、元インドネシアジュニア代表の Chandra と現米国代表の Jinadasa のペアと対戦しました。やっぱり負けると悔しいですが、楽しくプレーできました（確か 13～15 点ぐらいは取ったと記憶してます）。

ここでアメリカ赴任前のバドミントン部との関わりについて触れておきたいと思います。アメリカに赴任する前は 6～7 年ほど部のコーチを務めていました。コーチになったきっかけは 30 代を前にして個人戦の試合から身を引くのを機に当時の森下監督からお話があり、お受けしました。大学卒業後は自分の練習も兼ねてよく日吉に行っていましたので、コーチになっても当初はあまり現役への接し方は変わっていなかったように記憶しています。ただ部員数が減っていき、レベルも徐々に落ちていったため、途中からは練習メニューについても関わっていきました。ある時、トレーニングをやらせたら大ウサギで記念館の手前から舞台側まで一気に行けない、腕立てが 10 回もできないなど基礎ができていないのを目の当たりにして愕然としたのを憶えています。自分の現役時代に比べたら練習量（特にランニングやトレーニング）が著しく少なくなっていて、「これでは勝てない」と思いました。それからは現役からはうるさいコーチだと煙たがられながらも、しつこく言い続けました。私が現役の頃は上級生や OB から与えられた課題、罰トレには逆らわずにやっていましたが、いつからか言われたこともやらない世代もでてきました。正直どう現役と接していくか悩んだ時期もありました。でも結局は誰かが嫌われ役となって現役の尻を叩いていかないとダメだという思いに至りました。

慶応はインターハイ選手が入部してくることは極めて少なく、高校で厳しい練習を経験してきた部員は稀です。したがって彼らが高校、大学でやってきたことを大学 4 年間でやらないと慶応の選手は勝てないと思うのです。技術、体力、戦術の向上はもちろんですが、高校での実績が上の選手と対戦し、コートに立った時、「これだけやったのだから負けるはずはない」と思える自信がなければ勝てません。これは彼ら以上の練習を日々やって初めて持てるものであり、「練習は不可能を可能にす」という言葉に尽きると思います。

私のコーチ時代に現役だった若手 OB と飲みに行くと「厳しく言ってくれて良かった」と時々感謝の言葉をもらうことがあります（もちろん嫌われたままという場合もあるでしょうが）。嬉しいことです。でもやはり現役を卒業してから「もっと練習しておけばよかった」と後悔しないためにも特に日吉に通える若手 OB には親身になり、そして心を鬼にして現役に接してもらいたいです。現役の諸君は、日々の練習で妥協してしまうこともあるかもしれません。でも卒業してから後悔してほしくないし、充実した 4 年間だったと思える現役時代にしてほしいと心から願っています。

この創立 70 周年記念部誌が配布される頃にはアメリカでの任務を終えて日本に帰任しています。コーチだった独身時代とは環境が変わり、日吉に行く機会はずっと少なくなると思いますが、現役の諸君が掲げた目標に向かって一生懸命練習に取り組んでいる姿を見に行けたらと思っています。

写真１：Pebble Beach Golf Links にて

写真２：試合中の１コマ（手前が私）

慶應義塾体育会バドミントン部主将　川口太希

始めに、寄稿文を始めるにあたって私が慶應義塾体育会バドミントン部の創部 70 周年という記念すべき事業に関わらせていただいたこと、そして、主将を務めさせていただいていることに、感謝の気持ちを持つと共に、改めて主将という二文字に込められている重みや歴史を感じ、身が引き締まり思いであります。

今回、70 周年記念部誌の作成にあたり、60 周年記念部誌を始め過去の記念誌に触れる機会が何度かありました。そうした記録を今読ませていただく中で感じることは、月並みではありますが本当に多くの先輩の方々が積み重ねてきてくださった努力や歴史の上に現在の自分たちの活動が成り立っていることを思い知らされます。そして、私がいま関わらせていただいている、お会いしたことのある先輩方はそうした中のまだまだ一部に過ぎず、記念館での練習や日吉での行事等、また、リーグ戦などの試合会場に足を運んでくださっているほかにも、全国各地で我々現役部員の活動を気にかけ、応援してくださっている方々がいらっしゃるという背景を思うと、この身が奮い立たされ、力強い限りであります。

私がこうしたことを思う背景には、私の出身高校のバドミントン部の歴史がまだまだ浅く、ちょうど私が中学一年生として入学した年に同じく発足し、当時バドミントン部一期生として入部をしたことが少なからず関係しております。高校まで経験してきた環境とは全く違い、たくさんの素晴らしい先輩方のいらっしゃる、大学バドミントン界で最古の歴史を誇る慶應義塾体育会バドミントン部は私にとって非常に誇らしく、そしてまた、羨ましい集団でもあります。

さて、そんな歴史を背負って立つ、我々現役部員が克服すべき今のチームの使命は「勝つ」ことであります。過去の諸先輩方の残されてきた輝かしい戦績には、残念ながら及ばず我々は現在「男子四部」「女子三部」という状況であります。しかし、昨年は東日本大震災の影響により初リーグが中止となってしまう異例の事態のなか、秋リーグ戦で男子は五部全勝優勝し四部昇格、女子は上位とは紙一重の三部最下位となるも三部残留という結果を残しました。また、植田悠（大学四年）が男女を通し八年ぶりのインカレ出場を果たすという明るいニュースもありました。

こうした上昇気流の中バドンを受け継いだ我々は、主将である私はもちろんのこと、現役部員一人ひとりにはかなりの覚悟が求められております。だからこそ、普段から「勝つために行動できることはなにか」を常に一人ひとりが真剣に考え行動に移していき、バドミントンの技術向上、さらには、人間的成長を目指して参ります。

最後に、今後とも我々現役部員へのご指導ご鞭撻の程どうぞよろしくお願い致します。そして、我々現役部員の活動が慶應義塾体育会バドミントン部の未来をになっていることを胸に深く刻むと共に、我が部のますますの発展を祈願して挨拶と致します。